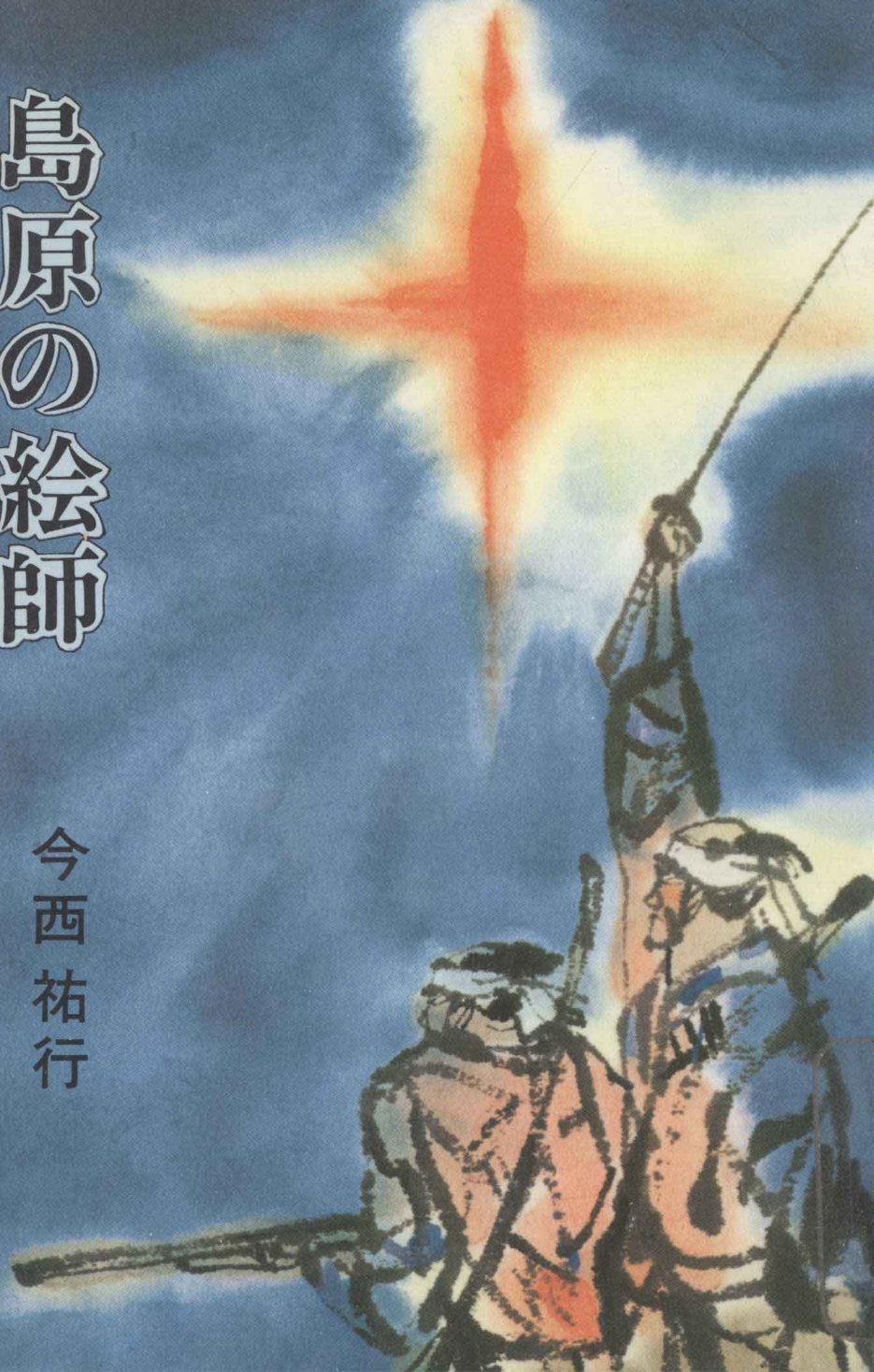


島原の絵師

今西祐行



紹介

祐行（いまにし・すけゆき）

二三年大阪府に生まれる。早

大学卒業。日本文芸家協会

員。びわの実学校同人。作品には、

「浦上の旅人たち」「肥後の石工」

「あるハンノキの話」「ヒロシマの

歌」など多数がある。

住所 神奈川県津久井郡藤野町牧

野一九八〇

斎藤博之（さいとう・ひろゆき）

一九一九年旧満川奉天に生まれる。

帝国美術学校卒業。絵本、さし絵

などて活躍中。一九七二年小学館

絵画賞受賞。

住所 神奈川県鎌倉市笛田

一七七九—一二

島原の絵師

文学のひろば・6

1978年12月10日 第1刷発行

定価 800円

1979年4月20日 第2刷発行

著者 いまにし すけ ゆき
今 西 祐 行

発行者 小 峰 広 恵

発行所 株式会社 小峰書店

160 東京都新宿区舟町6 電話 03-357-3521

振替東京6-195544

組版／国際文化交易株式会社 本文印刷／株式会社三秀舎

表紙印刷／合資会社斎藤印刷所 製本／小高製本株式会社

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

AD0918

©1978 今西祐行 斎藤博之

8393-6706-2349

今西祐行

島原の
絵師

峰書店

もくじ

はじめに……6

1 マンケシの花のマリア……9

2 ヨハネ有馬……21

3 「ハライソが見えませぬ」……24

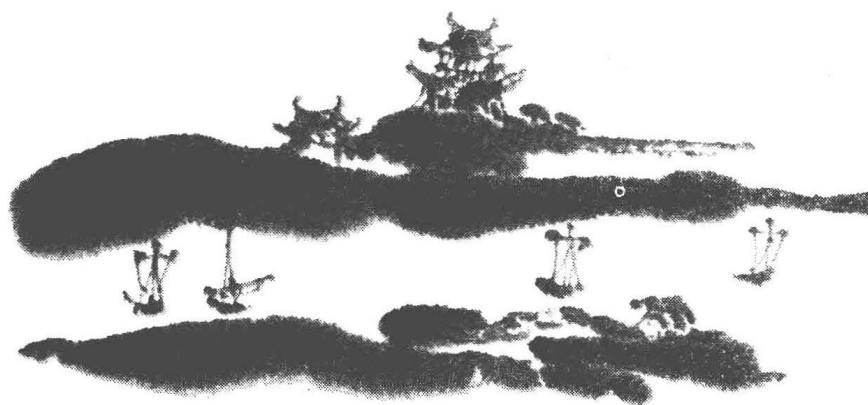
4 火あぶりの絵……36

5 フランシスコとマテオの死……40

6 浪人ざむらい……48



- 7 芦塚忠右衛門……57
あしづかちゆうえもん
- 8 ぶどう酒……63
- 9 長崎のマルチリ（殉教）……71
ながさき じゆんきやう
- 10 ナバロ先生……83
- 11 赤い雲……89
- 12 御使いくたる……103
みつか
- 13 『サンチャゴ』……120
- 14 ながれ星……127
- 15 湯島のなぞ……131
ゆしま
- 16 ふたりの天使……139
てんし



- 17 鉄砲名人・下針金作……146
 18 オランダ船……157
 19 小平とまんの使い……165
 20 マンケシの海……176
 あとがき……189

装幀・さし絵／斎藤博之



はじめに

寛永十四（一六三七）年十二月、徳川幕府のキリシタン弾圧と、藩主の重税に反抗した天草、島原の三万七千のキリシタンは、十六歳の少年天草四郎時貞を天童とあおぎ、原の古城にたてこもった。

幕府ははじめ板倉重昌を、また追いかけるように老中松平伊豆守信綱を総大将に、九州諸藩からなる十二万四千の大軍を動員して、この一揆軍をとりかこんだ。いわゆる島原の乱である。

キリシタンの信仰によってむすばれた一揆勢は、死闘をつづけ、よくその城をまもりつづけたが、あくる年の二月、食糧弾薬もついにつきはて、「サンタマリア」のさけびを最後に落城、女子どもをふくむ全員が殺され、その首は城外の水田にさらされ

た。

ただその中に、ひとりだけたすけられたものがあつた。南蛮絵師、山田右衛門作である。

かれは城中で、天草四郎の家老の地位にあり、弾薬、矢文などのことをつかさどる重要な役にあつたが、途中からその役目を利用して、ひそかに城外の敵と内通したのだった。

そのことが同志に発覚、城内でろうにとらえられているところを、落城の日に見いだされ、三万七千人のうち、たつたひとりの生存者となつた。

“ちえ伊豆”とよばれた松平伊豆守は、この内通者を江戸につれ帰り、キリシタン目明しを命じた。たまたま当時、江戸の町に放火魔が出没して火事がたえないことがあつた。ある日、伊豆守は、右衛門作に、火事をおこして打ち首になる罪人の断末魔のすがたをえがかせ、それを町のほうぼうにはりだした。放火はその日からびたりとやんだという。

しかし、山田右衛門作は、すてきれなかつたキリシタンの信仰が露見し、終身禁固

の身となって、長崎^{ながさき}におくられた。そのときすでに八十をこしていた。

1 マンケシの花のマリア

……おお、大筒おおづつが鳴っておりますの。あれはオランダ船でしょうかのう。わしらが子どものころも、ああして大筒は鳴らして船がはいってきよりましたよ。

……いいえ、長崎ながさきじゃございません。島原しまばらの先の口之津くちのつです。ポルトガルの船でした。あの美しか港、いま、どうなっておりますでしょうの。

船からうつ大筒の音は、二度三度まわりのおかにこだましてきえました。すると、おかからカランカランと教会のかねがひびきます。村じゅうのものが、港に集まりました。パードレパードレ（神父しんぶ）さまをおむかえするためでした。

番所ばんしょのおさむらいをのせた早船はやふねがこぎだされます。力いっぱいその小船をこぐのは、わしらの父でした。わしらはとくいでした。

「おとー、おとー。」

遠ざかっていく早船はやふねに向かって、なんども声ばかりかけました。

「えも、おらぶ（さけぶ）でなか。おさむらいさまがのっとなってじゃ。しゃーまぎる（でしゃばる）でなか……。」

母親はいつもそういつて、わしらをさとししました。

わしらの父は、もと平戸ひらどの船のりでした。いつのことかしりませんが、あるとき平戸ひらどについた南蛮船なんばんせんを案内あんないして口之津くちのづにやってきましたのでございます。かたことのポルトガルポルトガルのことばが話せましたので、みこまれ、有馬ありまの殿ととさまにおつかえするようになりました。

母はもとから口之津くちのづのひとつでした。

南蛮船にたどりついた早船は、しばらくすると、黒い服ばきなさったパードレさまをのせてもどってきました。岸につめかけた村のものが、口ぐちによるこびの声をあげます。

すると、パードレさまは、小船の中に立って、岸に向かってなんどもくりかえし、くりかえし十字をきって、祝福しゅくふくをなげながら近づいてこられました。

パードレさまがおつきになると、村じゅうは、もうまるで、お祭のようでした。

遠い町や村からも、夜どおし教会へおまいりにまいりました。

あくる日、パードレさまは、お城へ殿さまをたずねておいでるのが、ならわしたようです。

お城は、港から一里（約四キロ）ほど東の海岸にありました。有馬晴信さまのお城で、海べの高いがけの上にそびえておりました。原城ともうしました。

城外に、セミナリヨ（神学校）がありました。パードレさまがお城におのぼりになるとときには、青い服に黒いマントをきたセミナリヨの生徒たちが、口之津の船つき場までおむかえにまいりました。そして、行列の先頭に立ってお城に向かいました。港からお城まで、海ぞいの街道は、ほとんど人、人、人でうずまります。

わしらには、そのセミナリヨの生徒があこがれのまどでした。

わしらがそのセミナリヨの生徒になったのは、九年前に遠いローマにおいでた少年

使節の方がたが、おもどりになった年でした。

伊東マンシヨ、千々石ミゲル、原マルチニヨ、中浦ジュリアンの四人のうち、千々石ミゲルさまは、わしらが殿さまのいとこにあたります。

伊東マンシヨ、原マルチニヨ、中浦ジュリアンのお三方は、わしらと同じセミナーヨでごбенきょうになった方がたでした。

あの方たちがお歸りになったときは、有馬の城下はたいへんなにぎわいでした。

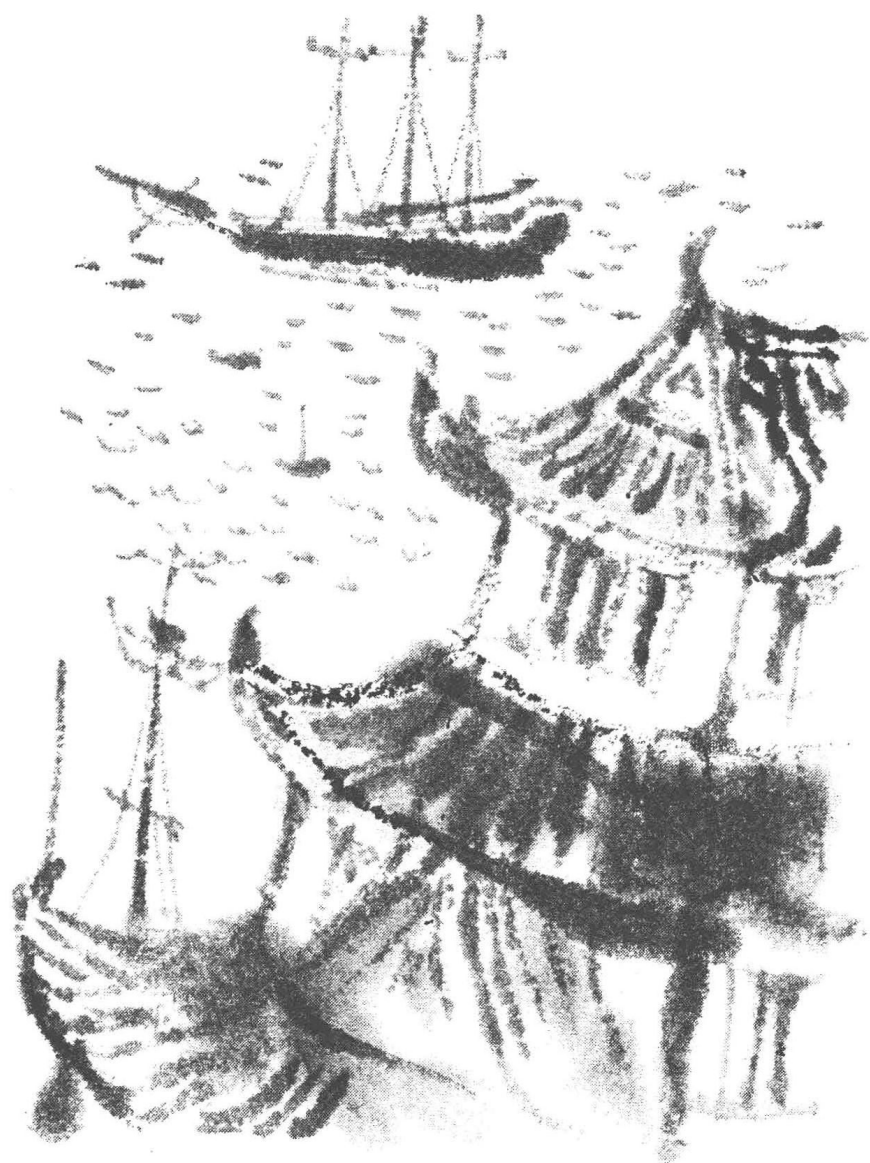
わしらも生徒になったばかりでしたが、みなさんのあとについて、はじめて原城にのびりました。使節の方がたをおむかえになる殿さまの前で、聖歌をうたうためでした。

海につきでたがけの上にそびえるお城は、おそろしく高うございました。そのとき、わしらはチラリとまどから海をのぞいて、思わず、

「ハライソ（天国）みたいに高いのうー。」

そんなことをいってしまいました。みんながわらいました。

セミナーヨのなかまは、クリスタン大名の若さまや、身分の高いおさむらいか、大



金持ちの子ばかりでした。わしらのように、なんのくらしいものの子は、ほんとうはいれなかったのです。わしらの母は、いばし（氣じょうぶな）おなごでしたから、ずいぶんくろうし、むりをして、わしらをセミナリヨに連れてくれたのでした。母は、男にまじって、漁りようにもできました。海にもぐりました。まずしい村のひやくしょう女にまじって、マンケシつみもいたしました。

マンケシをごぞんじですかのう。長崎ながさきにもさきましようかのう。砂浜すなはまにむらがつてさく、うすむらさきの美しか花ですたい。その花に、秋になると小さな実みがなります。その実をとってお湯につかうと、えろうからだがあつたまるという薬草やくそうです。母は、そんなものまで売って、わずかなお金はためておりました。

しかし、わしらがセミナリヨにはいると、漁にでることも、マンケシつみも、びたりとやめてしまいました。セミナリヨ（せいと）の生徒せいとの母親が、そんな商売しょうばいをしていては、子どもにはずかしい思いをさせると思ったからでしょう。

そんな母でしたから、わしらがはじめて生徒になつて家に帰りますと、まるでわしらがパードレさまか、イルマンさまでもありますかのように、外にでて、ていねい

に家にむかえいれてくれました。

わしら、どうしてか、えろうかなしかったのをおぼえとります。それから、できるかぎり家に帰らなくなりました。

セミナリヨのべんきょうですか。デウスさまのべんきょうのほか、日本語、ポルトガル語、ラテン語、それから聖歌、オルガン、ビオラ、クラボなどの楽器の演奏。ごそんじなかでしょうのう。わしらあまりうまくでけんでしたが、それは美しか音がいたしますよ。

それから絵やほりもののべんきょうです。絵ともうしましても、から、てんじくの墨絵すみえじゃなかとです。油絵あぶらえといましての、いろんな色ば、油でといてかくとです。わしらこれがいちばんすきでした。

ほかのべんきょうは、どうしても身分のよか生徒せいとにまけましたが、絵だけは、じまなばいたしました。それで、ようやくほかの生徒と対等たいとうにつきあえました。

セミナリヨには、イエズスさまや、マリアさまのおすがたをうつした絵がたんとあ